

ポーランド語の辞書

良い対訳辞書とはどんな辞書を言うのでしょうか。収録された語彙の数が多いい辞書でしょうか。訳語がたくさんある辞書でしょうか。用例がたくさんある辞書でしょうか。その通りです。語彙の数も、訳語の数も、用例の数も、多いほうが良いに決まっています。でもそれでお仕舞いでしょうか。というより、それが対訳辞書に要求されるいちばん大事なことなのではないでしょうか。

ポーランド語は言語類型論的に言うと典型的な屈折言語の一つです。屈折とは語形変化、つまり語がその文法的な意味を表わすために形を変えることです。動詞の屈折のことを活用、名詞や代名詞、形容詞、数詞の屈折のことを曲用と呼んでいます。

ポーランド語では、たとえば名詞は数（単数か、複数か）と格（主格、生格など全部で7つ）によって語尾を変えます。形容詞ではここに、性による変化（男性形、女性形など）が加わります。動詞はといえば、人称（1人称、2人称、3人称）と、時制（現在、過去、未来）と、法（直説法、命令法、仮定法）によって活用を行いません。

変化形のすべてを辞書の見出し語にするわけにはいきません。そこで、ポーランド語の辞書では通常、たくさんの変化形の代表として、名詞は単数主格形を、形容詞は男性単数主格形を、動詞は不定形を見出し語にしています。したがって、良い辞書とは、見出し語の語彙的意味、つまり訳語のほかに、その語が語形変化するか否かの情報、変化するならどのように変化するかという情報が、最低限、備わっていなければなりません。この情報を備えていなければ、収録語彙がどれほど多かろうと、辞書の名に値しない単語集、あるいは単語帳にすぎません。

この観点に立って、2つの辞典を紹介しましょう。

① 『[白水社ポーランド語辞典](#)』（初版 1981年、白水社刊）

上に述べた、辞書としての必要にして十分な文法情報を有する、今のところ日本で唯一無二のポーランド語・日本語対訳辞典です。そのポーランド語名 *Mały słownik polsko-japoński*（ポ和小辞典）のとおり、見出し語 22000 余りの小辞典ながら、ポーランド語の初級・中級学習者のみならず、上級者や専門家にもお勧めできる必携の書です。

この辞書では、語形変化をするすべての見出し語に、変化番号が与えられています。その番号を巻末の語形変化表から見つけ出し、範例に従って変化させれば、調べている語のすべての変化形が得られる仕組みになっています。万一、範例と異なる変化形がある場合は、見出し語の横の変化番号の後に、正しい形が挙げられています。

さらに、動詞には格支配が示されています。つまり、その動詞がどのような格の名詞を補語にするか、という統語論的情報です。

用例の数は多くありませんが、日本語訳は平明です。一方で、慣用句などの訳はこなれていて、訳語と相互に補い合うような工夫が見られます。

付録として「和ポ語彙」（3300 語）が添えられています。

①の辞書を駆使してポーランド語を学習し、文法の基礎と語彙、ある程度の読解力を身に付けられた方にお勧めしたいのが、次のポポ辞典、つまりポーランド語詳解辞典です。

② [Inny słownik języka polskiego PWN](#) Wydawnictwo Naukowe PWN, Warszawa, 2000
（異質ポーランド語辞典）

この辞典のタイトルは一風変わっています。inny という形容詞が冠されています。inny とはまさに、「他の、別の、異なった、もう一つの」という意味にはほかなりません。編集作業時の仮名は Nowy słownik（新辞典）だったが、さまざまな点で従来の辞典とは inny であることから、最終的には Inny słownik（異辞典）になったそうです。

この辞書の異質性はたくさんありますが、何と言っても、語の定義の仕方がユニークなことです。一言で言えば、コリンズ辞典のポーランド語版です。類義語の列挙という従来の辞書に見られる安易な方法ではなく、語義はすべて、自然で具体的な文脈の中で捉える文の形をとって説明されます。しかも、そこで使われる言葉は、共通語の中で広く用いられる語に限られ、複雑な概念はより単純な概念に分割されています。

これは誰のための辞書でしょうか。編集者自身は、収録語数（正確には、定義される語彙単位の数）10 万という数の多さから、ネイティブユーザーを筆頭に挙げていますが、外国語としてのポーランド語を学ぶ者を念頭において創られた辞書であることは、間違いありません。

この辞書の異質性はまだまだあります。関心のある方は、[筆者（石井哲士朗）](#)の書評（『[西スラヴ学論集](#)』第 10 号、西スラヴ学研究会、2007、147-156 頁に[掲載](#)）をお読みください。

ポーランド語の入門書

本学のポーランド語専攻、そして本郷サテライトのオープンアカデミーで使用している次の 2 点を挙げます。

①石井哲士朗、三井レナータ著『[ニューエクスプレス ポーランド語](#)』（白水社、2008）

会話形式（一部は、日記と手紙）のテキストを通して、文法の基礎を学ぶものです。文法項目は難易度を十分に考慮して全 20 課に配分されています。入門書としては扱われている文法事項の範囲が広く、この一冊をあげれば、中級程度の文法力を身に付けたとすることができます。独習書としても使えます。

②ボジェナ・シェラツカ＝バジュル、石井哲士朗著『[微笑んでポーランド語](#)』（東京外国語

大学生協出版部、2006)

副題は「日本人のためのポーランド語教科書」。2冊もので、第1部は「ポーランド語基礎文法」編、第2部は「コミュニケーション、語彙」編です。

この教科書がユニークなのは、日本語を知らないポーランド人教師と、初めてポーランド語を学ぶ日本人学習者を想定して創られていることです。そのための工夫が随所に見られます。たとえば、第1部は完全なバイリンガル構成で、見開き左ページがポーランド語、右ページが日本語で書かれています。つまり、同じ内容の文法解説が2つの言語で行なわれているわけです。13のステップからなる第2部は実践編です。ポーランドでの生活のさまざまな状況や、日本人とポーランド人の接触の場面で、実際に使われる生きたポーランド語が学べます。各ステップは、テキスト本文、会話、文法の練習問題、語彙とコミュニケーションの練習問題で構成されています。

(文責：石井哲士朗)